

ランダル・ジャレル作／モーリス・センダック絵

陸にあがった人魚のはなし

出口保夫 訳／評論社



評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号 第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

陸にあがった人魚のはなし

昭和56年5月20日 初版発行

定価 980円

訳 者 出 口 保 夫

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社 小林 製本

発 行 所 株 式 公 司 評 論 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

〈検印省略〉

陸にあがった人魚のはなし

ランダル・ジャレル作
でぐちやすお
出口保夫訳

さし絵
モーリス・センダク



THE ANIMAL FAMILY

by

Randall Jarrell

Text copyright ©1965 by Random House Inc.
Illustrations Copyright ©1965 by Maurice Sendak
Original English language edition published by
Random House, Inc. Japanese translation rights
arranged with Random House, Inc. through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.



も く じ

1 陸にあがった人魚のはなし 7

2 狩人が人魚とくらすはなし 31

3 狩人が小ぐまを家につれてきたはなし 53

4 冬ごもりをする小ぐまのはなし 63

5 りこうなやまねこのはなし 87

6 やまねこと小ぐまが少年をつれてきたはなし

113

7 人魚にそだてられた少年のはなし 129

訳者あとがき

157

陸にあがった人魚のはなし

1. 陸にあがった人魚のはなし



むかし、むかし、ずっとむかし、森が海にまでせまっていたところに、狩人が丸太小屋にひとり住んでいました。その家がかれが自分で切ってきた丸太と自分で割った板とで建てたものです。その丸太小屋は、一部屋しかなくて、海にちかい部屋のすみには、さくら色と、灰色と、緑色の玉石をならべた暖炉がつくってありました。——その石ころは、狩人が森のおくのがけから、腕にかかえてもってきたのです。砕いた貝がらの敷いてあるゆかには、鹿皮とあざらしの皮が敷かれ、ベッドのうえには大きな黒くまの毛皮が置いてありました。ベッドのうえの壁には狩人の弓と矢がかけてあります。

日焼けした顔と美しい髪と、見事なあごひげのある大男の狩人は、黄色の鹿皮のズボンと、シャツを着ていました。狩人の灰色がかった銀色のマントは、ライオンの皮でできています。雨や雪のときにかぶる帽子は、らっこの毛皮でした。暖炉のうえには、海岸の波に洗われている難破船でみつけた、大きな狩猟用のラ

ッパがかけてありました。狩人^{かりゆうど}は壁^{かべ}の丸太^{まるた}や椅子^{いす}の板には、きつねやあざらしややまねこやライオンなどの姿^{すがた}が、彫^ほりつけてあります。夜もふけて、狩人^{だんろ}が暖炉^{だんろ}のなかであかあかと燃えるたきぎのそばにすわっていると、部屋は暖炉^{だんろ}の火のあかるさで、半分はあかあかと輝^{かがや}き、あとの半分は影^{かげ}になって暗く見えました。燃えるたきぎはパチパチという音をたて、下のほうから聞こえてくる海岸の波の音をかき消^けしてしまふほどでした。

たきぎが燃えかすになり、燃えかすが炭^{すみ}になるまで燃えつきてしまふと、狩人はくまの毛皮のあたたかいベッドにもぐりこんで、あの波がくりかえす、美しくやさしい波音を聞いていました。まるでおかあさんが歌っているようだ、と狩人は思いました。それから、おとうさんやおかあさんがなくなって、自分ひとりで住んでいるのだなと考えていると、しらないうちに眠^{ねむ}ってしまうのでした。

——眠っているあいだは、おかあさんがベッドのわきで、歌いながらすわってい

ます。おとうさんは暖炉だんろのそばで、狩人の弓のつるを蠟ろうでみがいたり、長くて白い矢をなおしながらすわっているのです。

春になると、がけから海岸までつづく野原のは、いちめん花におおわれ、淡雪色あわゆきと海のような青色にみえます。狩人はそれを見ると、きれいだなあと思いました。家に帰って、見たものをはなししたいのに、そんな相手あいてはいません。——花をつんで両手にかかえてもってきても、だれにあげればよいのでしょうか。そのうち夕方になって、太陽たいようが濃い青色に染まそっていく遠くの離れ島はなをすぎて、海のむこうにまるで赤い世界せかいが消えていくように沈むときも、狩人はずっと見ているのですが、やっぱりそんなはなしをするひとは家にはいないのです。

ある冬の夜ふけに、狩人の姿すがたをしたオリオン星座せいざの帯おびや、刀のところにかたまつめって冷たくきらめいている星ほしを見ると、大きな緑色の流れ星がゆっくりと夜空を横切よこぎって行きました。狩人の胸むねはおどって、

「ほら、ごらん——」

ときけびました。でも見るひとなどだれもいなかったのです。

ある日の夕暮れ、狩人はベッドに横になっていました。やさしい夏のそよ風が、ひらいたドアからはいりこみ、月の光は窓のそばの床のうえに、白くまの毛皮のようにひろがっていました。狩人は考えごとをしていました。その思いが夢にかわると、夢のなかでおかあさんが歌を歌っているのです。するととつぜん目がさめて、頭がはつきりしました。それなのに、まだだれかが歌っているのが聞こえます。狩人は起きだして、野原をとおるぬけて海まで行ってみました。引き潮でした。狩人はしめったぬくもりのある砂のうえをあるきました。暖かく、ゆったりとした波は、狩人のくるぶしまであり、それは魚のうろこのように小さなはたて貝の泡になって、さわさわいいながら消えて行きました。

あざらし岩のあたりで、岩かげにかくれて何ものかが女のような優しい声で、

歌っているところでした。その歌には歌詞がついていましたが、狩人の聞いたことのないことばです。その曲にしても、狩人の聞いたことのないものでした。その歌が長く低い曲でおわると、海の波音のほかはなにも聞こえず、静かになりました。浅く打ちよせる銀色の波は、ちいさな「シッ」という音をたてて、ちょっと静かになると、ふたたび「シッ」という音をくりかえすのでした。

狩人はその歌手に呼びかけました。岩かげからいそいそではっていく音と、なにかが水に飛びこむ音がしました。——あざらしがいつもたてている音です。狩人は手をかざして、岩かげのまわりの月で照らされている場所を見つめました。でもなにも見えませんでしたし、もうなにも聞こえません。しばらくして狩人は家にかえりました。

つぎの晩も、狩人はおなじ声で歌っているのを聞いて、海岸におりて行きましました。新しい歌がおわるまで聞いてから、優しくそちらに呼びかけると、その歌手

はまえとそっくりおなじように水に飛びこみました。でも今度は、狩人^{かりゆうど}が岩かげのまわりの月あかりのあたりを見つめていると、つるつるぬれた頭が水のなかからあらわれ、輝^{かがや}くようなひとみで狩人を見つめ、それから海のなかにもぐってしまいました。それは狩人がこれまで見たことのないものでした。その長く、きらきらする髪の毛と肌^{はだ}は、海のうえを照^てらす月の光のようにあお緑^{みどり}がかった銀色^{ぎんいろ}をしていました。砂浜^{すなはま}ぞいにあるいてかえりながら、狩人は自分でも何度も何度も、人魚の歌の最後の曲を歌^{うた}っていました。

つぎの日、一日じゅうなにをしていても、狩人はその歌を歌っていました。ときどき、そのふしを忘れ^{わす}そうになって、これきり忘れてしまうのではないかという気がしましたが、かならず思い出すのでした。その夜、月がのぼると狩人は砂浜におりて行き、波うちぎわにすわると、歌をくちさみはじめました。ひとつひとつ、自分の知っている歌をぜんぶ歌いました。ひとつの歌とつぎの歌のあい

だに、人魚の歌で思い出せるのを歌おうとしました。狩人はずっと、あざらし岩のほうを見つづけていました。なにも見えません。でもしばらくすると、最初の白い波がしらのあとから、ぬれた頭があらわれるのが見えました。

人魚を驚かさないように、狩人はゆっくりと顔をそむけて、歌いつづけていました。自分の歌がおわりそうになったところ、狩人は横目をつかつて、人魚がぬすみ見できるくらいに近よってくるまで、すこしずつ、顔をそちらにむけて行きました。——月の光が人魚の髪やぬれた肩のあたりを照らして、きらきら輝いていました。それを横目で見ながら、狩人はその人魚の歌を歌っていました。でもその歌がおわりに近づくと、狩人は途中で歌をやめました。いっしゅん、静かになりました。それから、ひくい、かわいい笑い声が出たかと思うと、人魚がその曲のおわりのほうを歌っていました。狩人がはなしもなしに——人魚の頭や肩は、海のなかにすうっとすべって、まばたきをする間にあちらに行つて